

今週の為替相場見通し(2016年9月12日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		101.20 ~ 104.14	102.73	100.00 ~ 106.00
ユーロ	(ドル)		1.1139 ~ 1.1328	1.1233	1.1100 ~ 1.1600
(1ユーロ=)	(円)		113.82 ~ 116.10	115.35	112.00 ~ 119.00
英ポンド	(ドル)		1.3239 ~ 1.3445	1.3270	1.3190 ~ 1.3350
(1英ポンド=)	(円)	*	135.02 ~ 138.53	136.24	133.50 ~ 138.50
豪ドル	(ドル)		0.7538 ~ 0.7732	0.7543	0.7480 ~ 0.7820
(1豪ドル=)	(円)	*	77.40 ~ 79.13	77.44	75.00 ~ 79.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 100.00 ~ 106.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

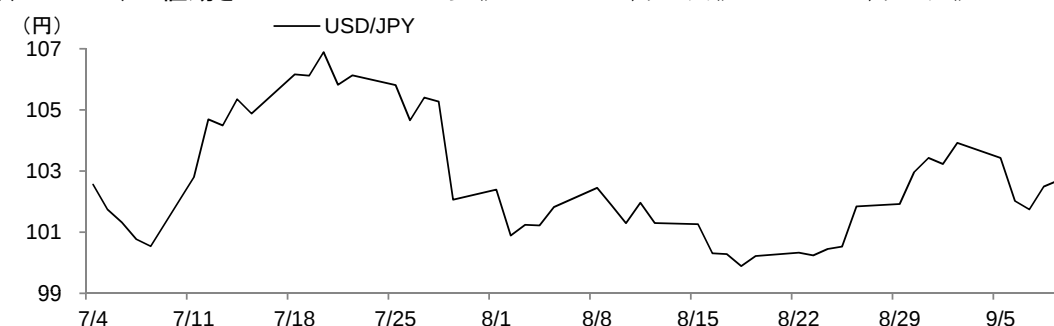
先週のドル/円相場は下落する展開。週初5日に103円台後半でオープン。前週末の米8月雇用統計発表後のドル買いの流れを引き継ぎ、一時週高値となる104.14円まで上昇。その後、黒田日銀総裁の講演が目新しさに欠ける内容だったことなどから円買いが強まり、ドル/円は103円台後半まで値を下げた。6日は浜田内閣官房参与の「FOMCの政策決定前であることから、9月日銀金融政策決定会合では追加緩和は行わない方がよい」との発言が意識され103円台前半まで下落。米8月ISM非製造業景気指数が市場予想を大きく下回ると、ストップロス巻き込み102円近辺まで下落した。7日にかけてドル売り地合いが継続し、日経平均株価の下落も重なると、ドル/円は一時週安値となる101.20円まで下落した。8日はECB理事会の結果を受けてユーロ/円が上昇する動きに連れられ、102円台前半まで上昇。その後、米金利上昇を受けてドル買いが強まると、ドル/円はストップロス巻き込み102円台後半まで上昇した。9日はローゼン格林・ポストン連銀総裁、カプラン・ダラス連銀総裁の相次ぐタカ派発言にドル買いが強まると103円台前半まで上昇するも、その後はドル売り優勢の展開に転じ102円台後半で越週した。

今後2週間のドル/円相場は、日米の金融政策決定会合への期待感から底堅い推移が続いた後、イベント通過後に下落する展開を予想。注目材料は21日(水)の日銀金融政策決定会合及びFOMC。前者ではこれまでの金融政策について「総括的な検証」が予定されている。最近の黒田日銀総裁の発言を踏まえると、マイナス金利の深掘りを含めて今後の追加緩和の可能性を示唆する内容となりそうだが、FOMC直前であるため、今会合での追加緩和は見送られると予想する。結果、会合後には円買いが進行しよう。後者ではFRB高官による相次ぐタカ派発言もあり、利上げの可能性は熾っている。ブラックアウト期間に入る直前の12日(月)にハト派とされるブレイナード理事の講演が予定されており、内容次第では9月利上げ期待が盛り上がるだろう。しかし、足許の米経済指標は良好な数字が続いているとは言えがたい状況下、今回の会合で利上げが先送りされる可能性が高い。万が一、利上げに踏み切っても、利上げは一旦打ち止めとの見方が広がりそう。そのため、公表されるFOMCメンバーの政策金利見通し(ドットチャート)を確認する必要があるが、利上げの有無に拘わらず最終的にはドル売りを招くと見る。重要イベントの結果次第で一時的に上下に大きく変動するものの、基本的にはイベント後に下落する展開をメインシナリオとして予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き:

安値 101.20 円 高値 104.14 円 終値 102.73 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 下山 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1600 112.00 ~ 119.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

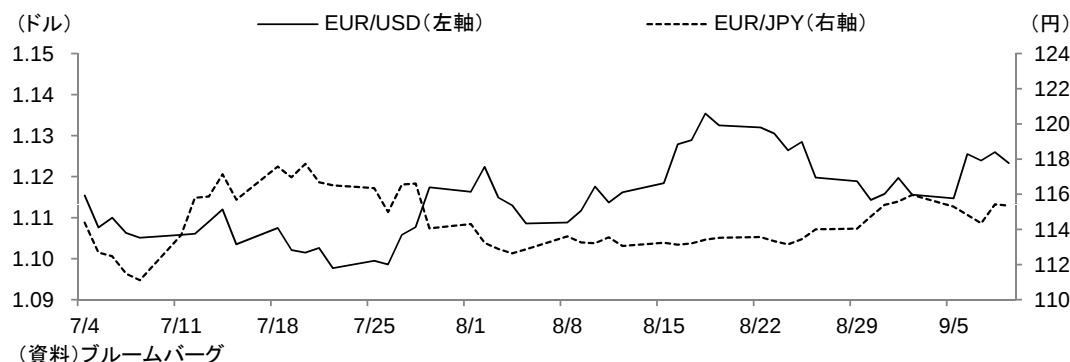
先週のユーロ相場は上昇する展開。週初5日、1.11台後半でオープンしたユーロ/ドルは、独8月サービス業PMIやユーロ圏8月サービス業・総合PMIの悪化を嫌気し、ユーロ売りが強まると、1.11台前半まで下落した。但し、対円ではこの日に週高値となる116.10円をつけている。6日にはユーロ/ドルは一時週安値となる1.1139をつけるも、その後は米8月ISM非製造業景気指数の大幅な悪化を受けたドル売りを背景に、1.12台半ばまで上昇した。7日にかけてもドル売り地合いが継続し、ユーロ/ドルは1.12台後半まで上伸。その後はECB理事会を控える中、1.12台半ばで落ち着いた値動きが継続した。ただ、ドル売りが進む中でドル/円が下落し、ユーロ/円はこの日に週安値となる113.82円まで下落した。8日、注目されたECB理事会において金融政策の現状維持が発表され、更にドラギECB総裁の会見において追加緩和に消極的な発言が見られるとユーロ買いが強まり、ユーロ/ドルは一時週高値となる1.1328まで上昇。その後は米金利上昇を受けたドル買いに、ユーロ/ドルは1.12台前半まで反落した。9日は、FRB高官の利上げに対するタカ派的な発言もありドル買いが優勢となり一時1.12割れまで下落したが、結局対ドルでは1.1233で、対円では115.35円で越週した。

今後2週間のユーロ相場は、徐々に上昇する展開を予想する。ポイントは、ECBの金融政策スタンスおよび21日(水)に結果が公表されるFOMCだろう。まずは前者だが、8日のECB理事会では金融政策が据え置かれ、ドラギ総裁の会見ではタカ派的な発言が聞かれた。追加緩和の催促相場から決別するかのような姿勢であり、市場参加者としてはうかつにユーロ売りを仕掛けづらくなっている。斯かる状況下、そもそも大幅な経常黒字を有するユーロ圏であり、実需のユーロ買いも相俟ってユーロ自体として底堅い値動きになると考えている。一方のドル。こちらは9月20~21日に開催されるFOMCで利上げが決定されるか、また公表されるドットチャートでどのような政策金利見通しが示されるかが重要となろう。端的に言って、足許での市場の9月利上げ織込み度合いは決して高くない。FRB高官からはタカ派的な発言が多く見られる印象だが、雇用統計を始めとする重要な経済指標で弱いものが意識されるからだろう。こうした地合いの中、利上げが見送られれば、今後も利上げはできないとの見方が台頭し、ドル売りの流れからユーロ相場は上昇するだろう。今回利上げがあったとしても、公表されるドットチャート次第ではあるが、今の米経済を見る限り連続的に利上げすることは難しいとの状況に変わりはなく、追加利上げ期待への期待は後退すると考える。よって、利上げの有無に拘わらず、ドル高の動きは限定的となり、ユーロ相場は上昇するのではないかと。金融政策に大きく左右される相場になるため、ECB及びFOMCそれぞれから発せられる材料次第に注意が必要となるものの、基本的には今後2週間のユーロ相場は底堅く徐々に上昇する展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き:

	(対ドル) 安値	1.1139	高値	1.1328	終値	1.1233
(対円)	安値	113.82	高値	116.10	終値	115.35



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3190 ~ 1.3350 133.50 ~ 138.50 円

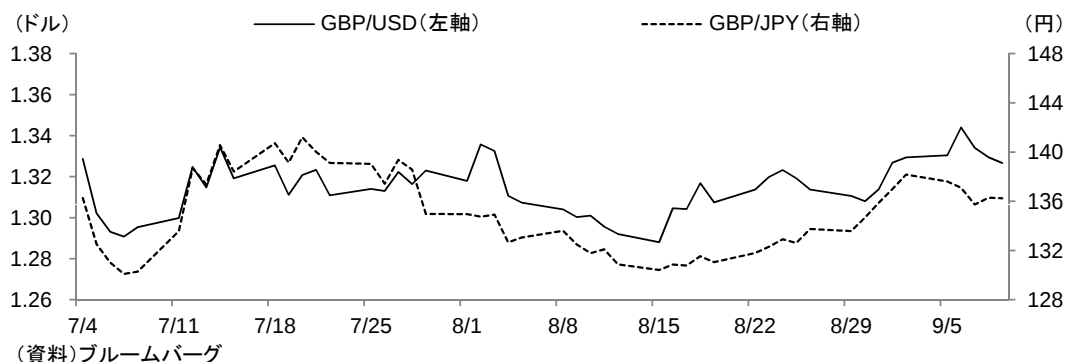
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、堅調気味の横ばい先行から反落。対ドルでは一時水準を切り上げたが、週引けに掛けての続落で結局安値引け。対円では週引けに掛けて進んだ円全面安に若干水準を切り上げて引けた。ポンドが堅調気味の滑り出しを見せたのは、週明け5日発表された英8月サービス業PMIの大幅上振れが少なからず貢献した。6月の英EU離脱国民投票後に悪化した景況感が、予想外に急速に回復したことで、「EU離脱による英経済への打撃は限定的」との見方が広がったようだ。6日、ポンドは対ドルで大きく水準を切り上げたが、これは同日発表された米ISMの8月非製造業景況感指数の悪化を受けたドル安。米早期利上げ観測を大きく後退させてドル全面安を招いた。8日には欧州中銀理事会が、市場の予想に反し金融政策を据え置き、ユーロの上伸を招いた。市場では資産購入の期間延長などの追加金融緩和を見込む声が強かった。もともとユーロの上昇は長続きせず、程なく頭打ちから反落。週引けに掛けて主要通貨市場では円安が支配的となった。日銀が21日の金融政策の総括的検証で、「マイナス金利は効果の方が大きい」と検証結果をまとめるとの観測が広がり、マイナス金利引き下げを含む追加金融緩和への思惑が強まったことが背景にあった。

今週・来週の英ポンド相場は、上値の重い頭打ちから、再び安値を試しに行く展開を予想。ポンドの下げ余地を測るのに、21日(水)の米連銀公開市場委員会は大きな鍵を握るだろう。EU離脱投票後の英経済に関しては、先週見られたように「恐れていた程悪くない」との見方が支配的になってきている。これまでに発表された7月小売売上高や8月の各種PMIなどが市場予想を大きく上振れたことがその背景にあるのだろうが、まったく見当外れの議論と感じられる。EU離脱の影響は、少なくとも数年単位で出る長期的なものであり、かつ、今後取り交わされる通商交渉などの内容次第で大きく変容するはず。6月の国民投票直後のヒステリックな悲観も行き過ぎなら、足元の妙な楽観も短絡的に過ぎる。同じ理由で、先週、「英中銀の(8月)利下げは拙速」との批判が与党議員から聞かれたりもしたが、なけなしの利下げ余地を早々に吐き出してしまった英中銀の判断が、中期的にポンドの下押し圧力になっていく可能性は現実的に警戒されるだろう。英国民の意向(移民流入の制限)を反映させるためにはEUとの自由貿易に対する一定の制限を回避するのは困難だし、許認可制で営業する金融、法律、会計、医療などの産業(押し並べて高付加価値=高額所得者=高額納税者=高額消費者)を英国内にとどめおくための交渉がすんなりとまとまる可能性も高くはない。こうした環境は、あくまでも現時点で最も蓋然性の高いシナリオに過ぎず、今後の交渉次第の部分もあるが、現時点で、英経済の先行きにもポンドにも強気になるのはやはり難しい。仮に米連銀が追加利上げに傾倒していくのであれば、ポンドの劣勢はいよいよ鮮明にならざるを得ないだろう。この間発表予定の英経済指標などでは13日(火)の英8月消費者物価指数、14日(水)の英5~7月失業率(ILO基準)、同平均賃金、15日(木)の小売売上高などに一定の注意は必要だが、上述の通り、EU離脱の影響を推し量る上ではほとんど役に立たないだろう。15日(木)の英中銀金融政策委員会では基準金利(0.50%)、資産購入額上限(4350億ポンド)共据え置きが予想されており、ポンドへの影響も見られないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き: (対ドル) 安値 1.3239 高値 1.3445 終値 1.3270
(対円) 安値 135.02 高値 138.53 終値 136.24



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.7480 ~ 0.7820 75.00 ~ 79.00 円

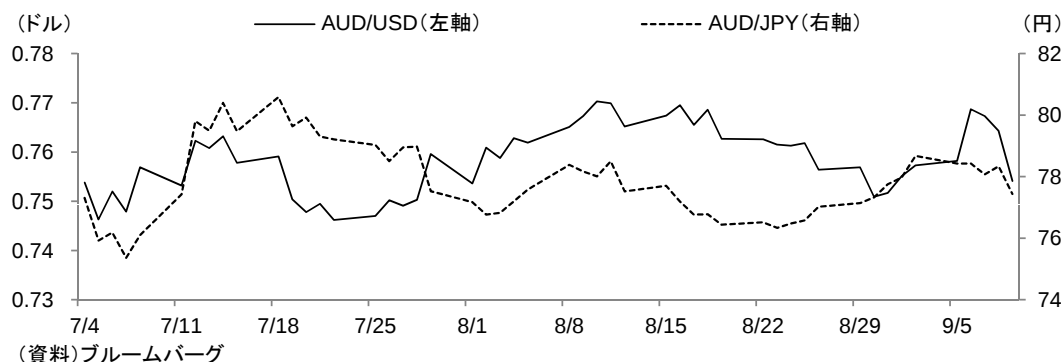
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、米利上げ期待の高まりと後退に左右される展開。週初から週半にかけては、米利上げ期待の後退を受けたドル売りから豪ドルが押し上げられるも、週末にはローゼングレン・ボストン連銀総裁の発言などから米利上げの可能性が再度意識され、豪ドルは反落した。週初5日、豪ドル/ドル0.75台後半、豪ドル/円78円台後半でオープンした豪ドル相場は、米8月雇用統計を受けたドル買いの流れが一巡し、ドル売り優勢となったことで、豪ドル/ドルは小幅上昇し0.76台までレベルを切り上げた。豪ドル/円は円買いが強く78.3円付近まで反落した。翌6日は、豪4～6月期経常収支の改善、続く豪州準備銀行(RBA)理事会における政策金利の据え置きなどを受けて、豪ドル相場は上昇。豪ドル/ドルは0.76台半ばまで、豪ドル/円は週高値79.13円まで上昇した。ただし、NY時間に発表された米8月非製造業景気指数が予想外に落ち込んだため、ドル売りが一段と進行したことで、豪ドル/ドルは0.768近くまで一段上昇したものの、豪ドル/円はドル/円の下落に連れ、78円半ばまで反落した。7日は、朝方にドル/円が一段と下落し、豪ドル/円は77円半ばまで前日比で1円ほど下落。その後、豪4～6月期GDPが発表されるも、ほぼ市場予想通りとなったことで、市場の反応は限定的となり、豪ドル/ドルは0.76台後半での推移が継続した。8日は、豪7月貿易赤字が市場予想以上に縮小したことで豪ドルは再び買われ、豪ドル/ドルは週高値0.7732、豪ドル/円は78円半ばまで上昇した。NY時間に発表された原油在庫統計が在庫大幅減となったことで原油が急伸し、米金利が上昇すると、ドル買いの流れから豪ドル相場は押し戻され、豪ドル/ドルは0.765付近、豪ドル/円は78円台前半まで反落した。週末9日は、ローゼングレン・ボストン連銀総裁の発言などから米9月利上げの期待が高まり、豪ドル相場は下落幅を拡大した。豪ドル/ドルは週安値0.7538、豪ドル/円も週安値を77.40円つけた後、ほぼ同水準で越週している。

今週から来週にかけての豪ドル相場はFOMCを控えたドルの動向に振られる展開を予想。具体的には、今週は米利上げに備えドルが買い戻されることで、豪ドルが弱含む展開を予想。しかし来週については、FOMCでは利上げが見送られることで、ドルの失望売りから豪ドルは買い戻されるだろう。先週はジャクソンホール会合で高まった米9月利上げ期待の剥落からドル売りが優勢となった。しかし、週末には米株が大きく売られるなど、米利上げに備えたポジション調整の兆候が見られている。今週はFOMCを来週に控え、度々「備え」のドル買いから豪ドル相場が押し下げられる展開を予想する。また、ブラックアウト期間前最後の講演として注目が集まるブレイナードFRB理事は、ハト寄りかつドル安推進派であるヒラリー米大統領候補の支持者として有名であり、同氏が利上げに積極的な発言を行えば更に市場の「備え」(ドル買い)が進む可能性はある。しかし、米ISM製造業・非製造業景気指数の悪化、雇用者数変化の鈍化といった利上げを見送る理由が存在する限りは、実際の利上げは見送られるのだろう。よって、ドル売りの流れから豪ドルは来週末にかけて再び買い戻される展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/5～9/9)の値動き: (対ドル) 安値 0.7538 高値 0.7732 終値 0.7543
(対円) 安値 77.40 高値 79.13 終値 77.44



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。